

特別活動における自治的な活動に関する一考察

— 成瀬仁蔵による教育理念と運動会の実践を通じて —

小 澤 由 理 *

1. はじめに

1.1 with コロナの時代と特別活動

2020 年は世界的な新型コロナ・ウィルスの感染拡大という未曾有の事態に見舞われた年であった。日本国中がコロナ・ウィルス感染の広がりを懸念するなか、教育や保育の現場では「3 密を避ける」感染予防への対応として、教師や子どもたちが直接に顔を合わせ、互いに声を掛け合うことすら難しい状況が続いた。そのような中、今年の秋に各地では、安全と健康に工夫を凝らした運動会が実施されたことは記憶に新しい。教育現場からは、同年の春から続いた学校行事の縮小・延期や全国一斉休校で疲れた子どもたちの心身の健康のために、そして学校行事ならではの達成感や子ども同士のつながりをなんとか感じさせたい、という学校現場の要望から、コロナ渦の運動会の実施に踏み切った事例が報告されている⁽¹⁾。コロナ渦において他者と直接関わることの難しい日常を経験したからこそ、我々は改めて集団活動における人とのつながりや触れ合いを基本とする特別活動の教育的意義を感じ入る局面にきている⁽²⁾。

特別活動は、一般に教科外の活動であるが、子どもたちの自主的で具体的な集団活動を通じた人間形成を図る教育活動として、学校や保育において欠かせないものである。とりわけ学校行事は、単調になりがちな学校生活にリズムをあたえ、よ

り生き生きとした生活を実現する。そして他の教科による学習では簡単に得られない集団としての体験を得ながら、自己の生き方への考えを深めることができる教育活動である。折しも 2020 年 4 月からは新学習指導要領が完全実施され、現行の特別活動の教育目標には平成 28 年度から中央教育審議会の答申のキーワードである、主体的・対話的で深い学び、協働的で親和的な体験活動、カリキュラム・マネジメントを活用した教育方法が盛り込まれた。これまで以上に、社会に開かれた体験型の学習や、児童・生徒同士の話し合いや触れ合いを通じた学びのプロセスが重視されている。我々はこのコロナ禍という困難な状況においても、新しく示された教育の方針とその方法から、特別活動における今日的な教育的意義を追求する必要がある。

さて現行の学習指導要領では、特別活動の教育の目標は従来のように「なすことによって学ぶ」ことを方法原理としながら、「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決すること」としている。さらに「集団や社会の形成者としての見方・考え方」として、特別活動を通じて育成されるべき資質や能力が明記されている。すなわち、人間関係の形成、社会参画、自己実現のという三つの資質や能力であるが、これらのうち、社会参画については今回の改訂の課題とされたもので、現代の複雑で変化の激しい社会を生きる児童や生徒の社会参画の意識の向上が求められた。そこで特別活動では①自治的能力はこれまで以上に育成すること、②キャリア教育を学校

* 江戸川大学こどもコミュニケーション学科こども実習センター

教育全体で進めていくこと、さらに③社会の変化や要請を視野に入れた防災を含む安全教育や体験活動などを、各教科等の学習と関連付けながら、その役割を果たすことが強調された⁽³⁾。すなわち今日の特別活動の在り方は、これまで基本としてきた児童生徒の自主的な意欲や自主的な活動を主体とする学びとともに、様々な集団活動のなかで話し合いを通じた合意形成をし実践すること、そして自治的能力や社会参画の力を身に着けることが目指されている。

1.2 問題の所在と研究方法

——成瀬仁蔵の教育思想と実践——

それではこの教育課題に我々はどうのように向き合い、実践するべきであるか。本稿はこの問いに対して、今日の特別活動の原型の一つとして、明治期から大正期に活躍した女子教育家の成瀬仁蔵の思想とその実践から検討を図りたい。成瀬仁蔵は、明治期に初めて設立された民間の女子高等教育機関である日本女子大学校の創立者である。成瀬の活躍した明治期は、女性に家庭のなかで過ごすものという社会的な観念が強く、女性の教育はもちろん女性が日常生活において戸外で運動を行うことや集団的な自主活動を行うことには社会的な制約の加えられた時代であった。そのような時代にあって、成瀬は日本女子大学校、および附属の高等女学校、小学校や幼稚園において、児童生徒の自主性を重んじる「自学自動」の教育理念とする教育実践を行った。とりわけ学生の自主的かつ集団的な自治活動を重んじ、社会に開かれた教育の実践を試みた。なかでも日本女子大学校の運動会は、成瀬の一連の教育実践の総体として位置付けられた。成瀬はどのような考えから、学生の自治活動を実践したのか。学校行事としての運動会の位置づけはどのようなものであったか。そのような思想と実践は今日的にどのような意義を持つのか。

これまで彼の教育思想や実践に関する研究は多く存在するが、女子教育の発展という観点から検討されることが多い⁽⁴⁾。また成瀬仁蔵の女子体育

史や日本女子大学校の運動会史を研究した馬場や小川もまた、女子体育史の発展という観点からの検討であり、成瀬の教育実践を今日の特別活動の先駆的实践としては強調していない⁽⁵⁾。一方、成瀬の思想を大正期の新教育という潮流の位置づけ、「学習者の主体的な学び」「アクティヴ・ラーニング」という観点から、今日的な教育の文脈に捉えなおそうとする研究もある⁽⁶⁾。大正期の新教育運動は、今日の特別活動の柱である自主性や創造性、自治や協同の在り方に大きな影響を与えた実践であり、本稿においてもこのような観点は重視したい⁽⁷⁾。以下、本稿は、成瀬の自学自動の教育理念と自治活動については、彼の著書である『新時代の教育』(1914年)⁽⁸⁾を分析し、その理念の内容に迫るとともに、日本女子大学校の運動会の実践については学内誌『家庭週報』や、『学報』を中心に検討する。

2. 成瀬仁蔵の自学自動の考え方

成瀬仁蔵(1858-1919)は山口県の下士族出身のキリスト教牧師であり、日本における女子高等教育の開拓者の一人として知られている。1890年(明治23年)から1894年(明治27年)にアメリカへ渡り、アンドーバー神学校、クラーク大学で教育学や社会学、キリスト教などを学びながら近代的な女子教育の研究を行い、1901年(明治34年)に日本女子大学校(現・日本女子大学の前身)を開校した⁽⁹⁾。日本女子大学校は、未だ女子に高等教育を行うことに反対する風潮が強い明治期末の日本において、最初に設置された民間の女子高等教育機関の一つである。成瀬は著作『婦女子の職務』『女子教育』等、アメリカ留学から帰国後から多くの女子高等教育論を発表し、西欧近代の影響を受けた新しい日本女性の育成と日本の近代化について説いた。なかでも1914年(大正3年)『新時代の教育』は成瀬が文部省に設置された教育調査会の委員として発表した論考を基に著され、女子教育に限らず、彼の教育全般にわたる考え方や、国家・社会の在り方を論じている。その

なかで彼は自身の教育理念である「自学自動」について語っている。(以下、() 内は『成瀬仁蔵著作集』日本女子大学1981年に収刊された『新時代の教育』の項数を指す。)

『新時代の教育』「第三節自學自動主義 第一教育の目的と自學自動主義」によれば、まず教育の目的について、「世界人類の文明の進歩、國家社會の發達に存すれども、・・・其の直接に對象とするものは即ち個人にして、實に自己を善美に實現し、其社會國家に有用なる生活を營む所の高尚有爲なる人物を養成するに在りといふべし」(p.147) という。そして、そのような「高尚有爲なる人物とは、先天の靈性たる人格的生命の自ら個性的に發動實現して、優秀なる品性を成し、充實なる活力を具へたる者」であり、「自己の使命天職とする所に於て、偉大なる獨創の功業を社會に成就し、以て自らたち、且つ人を救ひ、世を濟ふ」(p.149) ことだとしている。成瀬によれば、そもそも人間には「先天の貴重なる生命たる自發的動力」があり、「其の發現する所優秀な人格」となるのだという。ここでいう自發的動力とは「即ち人の生長發達し、活動進歩し得る所以の根本動力」であり、この自發的動力こそ、やがては人を「特異の個性才能となり、獨創の功業となり、國家社會の努力となり、集まりては世界の文明強化となる」(p.148) ことを導くと期待している。要約すれば、教育の目的は、人間が持って生まれた生命としての自發的な動力によって高尚な人物として育成することである。そしてそのような個人が育てば、個人は優秀な人格を形成し、自らの才能でもって独創的な仕事をなしとげ、それが國家社會の力となる、更にそのような個人が集まることで世界の文明は強化される、という。

そこで成瀬はそのような教育の方法は「各人の自發的動力を開発培養」(p.149) することにあると説く。「…然るに人の根本動力は、是れ實に人格的生命たる、自具内發敵の、微妙なる靈性にいて、外よりして注入し、博授し得るものに非ず。唯刺戟を興へて之を觸發せしめ、機會を興へて之を開展せしめ、又境遇を興へて之を活動せしむる

ことを得るのみ。其の涵養とは、…外的條件を適當に具備供給して、以て自力に依る其の開現を、為し得る限り多量ならしむ謂ひなり。」(p.149) と述べている。そして青少年には「此の自發的動力を涵養し、以て進みてやむこと能わざる生活の興味となし、自ら學び自ら習ひて飽くことを知らざる欲求努力となすこと」が重要だと説く。すなわち、教師や學校制度などの外的な強制力でもって学生の學習意欲は高められるのではなく、学生の内發的な動機づけでもって學びを探究し続けることを主張する。そしてそのような學びを生活のなかでの興味とすることを指摘し、すなわち、学生の自發的動力は「實地に生ずべき生活法を自得せしむるに至り」(p.149) と説き、教育は、そのための必要な環境を整えていくことを説いている。成瀬はこのような教育の在り方を「自學自動主義的教育なり」(p.148) と述べている。

このような学生の主体的な學びを重視した「自学自動」の教育思想は、アメリカ留學を経て成瀬がアメリカ進歩主義者デューイの思想に強く影響された⁽¹⁰⁾。實際、成瀬はデューイとは深い親交を結んだ仲であり、共に画一主義や、詰込み主義的な一方的教授を打破し、子どもの興味関心や體驗を尊重し、児童・生徒の生活を中心とした教育の在り方を追求した。成瀬の言う教育現場における子どもの自發的動力の發現こそ、今日的な教育課題でいえば、アクティヴ・ラーニングに通じる考え方であり、主体的な児童・生徒の活動を主軸とする特別活動の原動力と考えられる。さらに成瀬は、學校に課される教育の使命は「學校内に在りて、既に完成せるところの人物を社會に出すを原則とせず。自ら完成する力を有し、且つ其の方法を知れる所の人物を社會に出すことを以て原則と為す。」(p.148) と述べる。學校教育では、人間を完成させるのではなく、卒業後に、各自が生涯をかけて人間として成熟していくための方法を獲得させることが第一とした。このことから今日の生涯學習、キャリア教育に通じる展望を備える理念であったことがわかる。

このような自学自動主義の教育理念は、幼児教

育から高等教育に通じる教育の根本思想として、成瀬は日本女子大学の附属の高等女学校や豊明幼稚園の教育にも徹底させた。ゆえに成瀬は自学自動の教育理念を、学風として、日本の学校教育全体に根付かせるよう主張したのである。(「第十三 学風改善に関する総収」p.174 p.177)

3. 自学自動と自治活動

3.1 自動的意志のための資質・能力

それでは、集団や社会の中で個人がどのように自らの自発的な活動を発揮するのか。以下はこの点に注目して、成瀬の自学自動について検討したい。『新時代の教育』では自学自動の教育理念の概要を述べたのち、続いて「先天能力の開発」(「第二 先天能力の開発」)、「信念の涵養」(「第三 信念涵養の必要性」)、「個性」(「第七 個性を發達せしむる事」)、「創造的能力」(「第八 創造的能力の涵養」)、「自動的意志の修練」(「第九 自動的意志の修練」)、「自治生活」(「第十一 自治生活の訓練」)という観点から学習者の資質・能力の育成を行うことを指摘している。

まず成瀬は學生の自発的動力を発揮するためには、「自ら判断し、自ら決定し、自ら実行する」ための「自動的意志の修練」(「第九 自動的意志の修練」)として、自己の能力を信じて、「自己の感ずる満足の中」で自らの創造的な活動を実行することを説いている。そして、そのような活動には「冒険の氣風」、すなわち「果敢勇往、執着忍耐の實行的勇氣」を養う必要や、「勤勞の興味習慣」を養う必要性を説く(p.165)。すなわち自らの独創的な能力を発揮し仕事をなすには、周囲や社会に対して思い切った態度で構える勇氣を持つ必要である。しかしそのような行為は決して他者を無視した独りよがりな行為ではなく、世の中の規律秩序を守り、周囲や社会のために忍耐強く献身的に努力するものだと言っている(p.166)。

また成瀬は、「創造的能力」(「第八 創造的能力の涵養」)の育成として、學生が自らの学びの活動をまとめ、他者に対してプレゼンテーション

を行う力の必要性を説く。成瀬は自ら探求する「新事物を構成する能力」と呼び、その能力とは、「事物に秩序を立て、系統を作り、散亂せる材料を統一し、零細なる事物を集約して、以て一完全體を作り出すところの、案出工夫の能力」(p.163)である。この能力は、たとえ困難な障害があっても、静かに熟慮工夫をして、その問題について研究し足りないところを補うことができる力を育てる、という。そうして試行錯誤をして構成した物事は、他者に向かって発表することが重要だと説く。「発表を廣義に解すれば、即ち總ての實行」であり、「狭義に解すれば、即ち所謂芸術なり」とのべる。発表の技能は、いわば「抽象的思想を具體的事業に轉移表現する動作を基礎と為す。」(p.164)とも述べる。

成瀬がこのようなことを述べる背景には、当時の女性にとって知的教育そのものが無用とされ、自らの意見を発表する、主張することに否定的な一般的風潮があった。おそらく學生たちもその殻をすてきれていない状況があったと考えられる。ゆえに自学自動の教育はそのような社会の風潮に対して、女性たちが勇氣をもち自立的に生きる教育として、學生自ら進んで考え、構成したものを発表することを奨励した。そして、その教育の一環として重視されたのが、學生たち自身による集団による自治活動であった。日本女子大学校では各学部には研究と発表という活動が用意され、学内で學生が学んだことをそれぞれに研究し、発表する機会があった。図1(P5内)にあるように、発表の場の範囲は広く、寮舎での日常生活、係活動、各種学校行事(研究会・展覧会・文芸界・運動会)が設けられた。

3.2 自治活動による社会参画力の育成

集団による自治活動を重視した成瀬の考えの背景には、成瀬が、人間には「社會的生活を好むのは殆ど生類の本能」があり、「社會性」(「第十 社會性の涵養」)「社會全體の關係の中に自己を確立し、社會全體をしてこれを認識せしめんことを求」める欲求があることを指摘する。そして「人

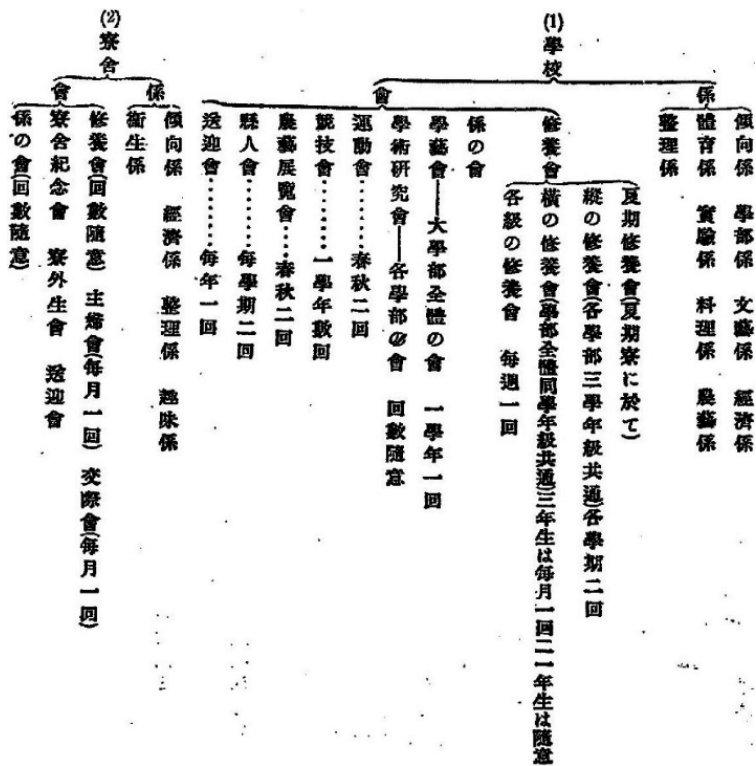


図1 日本女子大学校における自治組織

出典：日本女子大学校（1910）『日本女子大学校の過去現在及び将来』 pp.146-147

の社會に於ける生活」は、人間同士が互い「に相應し、緊密なる關係の組織の中に、相互相呼応し、相感化し、相援助し、相養護し」ながら、「各自の人格的獨立活動を保つ」（p.166）ものだと述べる。「自らなし、自ら治むといふ一面に於いては、必ず他人あることを豫想す」ることであり、成瀬は自立した個人こそ他者と調和的な關係に存在であることを繰り返す。「即ち自治の意は孤立に非ずして、共同生活の方法」（p.169）であることを説く。そして「共同生活を圓滿にし、且つ共同關係の中に獨自の生活を保持し行く方法なり。」（p.169）と述べる。続けて、「自治生活は、個性と社會とを調和し、個人主義と國家主義とを調和し、各個人の生活と全體の活動とを調和する方法なり。個人に於いては自動的意志と社會性とを調和する方法なり（p.169）」という。

そこで求められる教育方法について成瀬は学生による自治活動を強調する。「学校における自治

的訓練の方法は、一、学生各個をして、自己の一身に関することはなるべく自ら處理し、自己の力によりて、獨立的に生活を統制せしむる事を、二、學校乃至教師の干涉を避け、なるべく、學生をして種々の事務を負担せしむる方針を採る事、三、學校全體を一箇の自治體と見做し、學生自己の力に依りて其の生活を統制しゆく方針を採る事の三項に分るべし」（p.170）と述べる。また教師には「實地の會に於て各個人間の友誼を進め、全體の關係生活を緊密ならしむるが為に、適當なる指導」（p.164）を行う必要があると説く。

3.3 大學部と附属高等女學校における自治組織

図1はこのような考えの下、日本女子大学校が組織した学生の自治活動を示している。これによれば、各学年における「係」の構成と、各学校行事を運営する組織である「會」が存在する。これ

らはそれぞれ各種学校行事、學寮や夏季学校の日常業務、卒業後の学生たちによる桜楓会の活動を分担し、学生自らの企画や運営、進行が年間を通して実施した⁽¹¹⁾。

また自治組織は日本女子大学校創立とともに併設された附属の高等女学校においても組織された。(図2)。高等女学校の組織もまた、構成と発表に分けられるが、「大学部のそれに比すれば、其種類少く、其仕事も簡単にして、大要同一」⁽¹²⁾であった。

このように学校生活、そして卒業した後の社会生活に、学生たちが其々の役割や立場を担い、学舎が一個の自治体としての機能をもたせ、成瀬の言う自学自動の学風を構築することを目指したと考えられる。日本女子大学校の10年史である『日本女子大学校の過去現在及び未来』には、これらは「自修自治を以て、各自の信仰を確立し、團體心の養成と健康の増進とを図ること」を目的に作られ、「自學を以て、各學部及び各個人の特徴發揮に力むること」が目指された⁽¹³⁾。成瀬はこれらの係や會に所属することで、以下、三つの資質を磨く必要を述べる。まず各人が自らの仕事を全うする「責任の觀念を養ふこと」(p.170)だと述

べる。それは確實に「之を完成する氣風を養成すること」につながるので、「自治生活に於いては殊に必要」(p.170)と述べる。そしてそのような仕事を全うする責任を持つからには、みなに対して自己の主張を行う「權利義務の觀念を養ふ事」(p.171)も必要と述べる。またそれぞれ活動は他者に依存するのではなく、それぞれ個人が「獨立心」をもつことが重要であると説く。「學生をして、獨立自營は自他相共に立つ方法なり」(p.171)と述べる。

4. 自治活動と運動会

それでは、日本女子大学校における具体的な自治活動について検討しよう。本稿では学校行事としての運動会に注目する。日本女子大学校では運動会は年に2回開催され、学校の教師や生徒が総出の体育の発表の場であった。成瀬は女子の体育の実践についても先駆者であり、運動会はまさにその日常の体育実践の発表の場であったのである。以下、成瀬の女子体育の考え方を整理し、学校行事としての運動会と学生の自治活動について取り上げる。

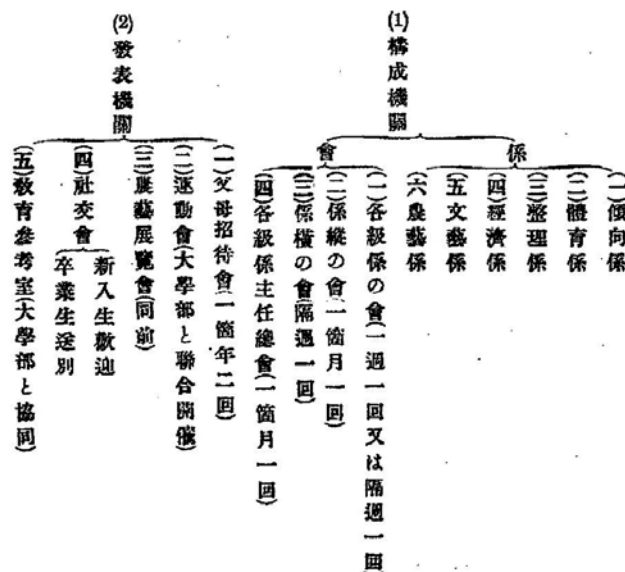


図2 日本女子大学校附属高等女学校における自治組織

出典：日本女子大学校（1910）『日本女子大学校の過去現在及び将来』 pp.167-168

4.1 成瀬仁蔵と女子体育

明治の初めの頃より、男子を中心とする軍事教練と体操は体育として学校教育に取り入れられたが、女子体育の推進については遅れていた⁽¹⁴⁾。成瀬はアメリカ留学で目にしたアメリカの多くの女子大学で体育が推進されていたのを『女子教育』（1896年、明治29年）に記し、日本の近代的な女子体育の重要性を訴えた⁽¹⁵⁾。折しも、高等女学校における本格的な体育振興は、1903年（明治36年）に「高等女学校教授要目」が制定され、高等女学校のスポーツ教育と運動会は全国に広まった。こうした時流のなか、日本女子大学校では開設当初より海外で行われる様々な女子スポーツや体操、ダンス（表情体操）を取り入れ、日本式への適用・開発・実践が行われた⁽¹⁶⁾。

成瀬は体育の目的について「身体健康、教育、休養を計る」もののだとして「身体健康なれば、精神自から健やかにして、頭脳常に明晰清浄なり、明晰なる時は智力盛ん邪念起こる事なし。」⁽¹⁷⁾と述べている。『新教育の時代』においても体育は重視される。体育は「健康の増進、筋肉の發育及び鍛錬」という目的があるが、そもそも「身體は、人格の生命の外界に發現する様式及び至機関」であり、「信念も理想も能力も…身體の中に宿り、身體によりて養はれ、身體によって現はる」（p.172）ものである⁽¹⁸⁾。それゆえ身体が健康であることは、重要なのだと述べる。そして「體育にして、唯學生の學校在籍中、他律的に健康を維持せしむるに止り、将来自ら其の健康を増進し、其の身體を支配し得る方法を會得せしめ」（p.174）るべきだと説く。すなわち体育とは学校の授業だけで完結するものではなく、生涯に渡って生活全体における体育法を身に着けることが重要だと述べる。そのような体育法を身に付けさせる教師の役割は、「學生の健康法に関する指導教師」として、「學生各個の健康法を指導せしむる共に、學校全體の設備、作業、學生の勉學生活法に就き、健康増進法に對する注意を為さしむるを要す」（p.173）と説く。また学校全体で学生一人一人の体質や卒

業後の学生の境遇を考慮した適切な体育法の指導をすることや、「採光換氣等に特に注意し、戸外運動を奨励し、郊外休養等の方法を設くるを要す」（p.174）と述べ、学校が組織一体となって一定の方針で統一した健康法の実施の必要を述べている。

このように体育と健康に関する意識は、当時の結核やスペイン風邪を始めとする感染症に、多くの人々がかり患し死に至る日常があった。日本女子大学校では、寮で暮らす学生のなかで結核などの流行り病にかかり、大学を休学したり退学する学生は後を絶たなかったし、離学後に死を迎えた者も多くいる⁽¹⁹⁾。そのような状況において成瀬が日本女性に最も必要だと感じていたのが体育であり、まさに生活による健康維持増進法は急務であった。

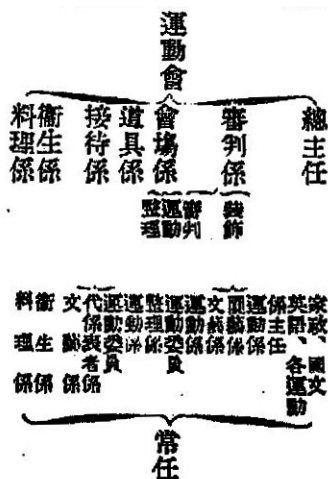
4.2 体育に関わる自治組織

このような体育に関わる日常の在り方を支えるのが、学生たちの自治組織であった。まず係には「体育係」が存在する。「体育係」の目的は、「學校及び寮舎に於て、團體的體育及び衛生と個人的體育及び衛生とを奨励して、各自の健康を増進し、精神教育と相俟つて、人格の修養に資する事」⁽²⁰⁾とある。学校や学寮、家庭において、学生が日々の健康衛生の向上に努める仕事であった。研究と発表に分かれ、学内の身体検査や体育活動、衛生に関わる業務を行った。団体活動による発表の場として、体育会と呼ばれる運動部が課外活動として存在し、成瀬や日本女子大学校の教員が持ち寄った新しい女性のためのスポーツが行われた。

4.3 学校行事としての運動会

それでは学校行事としての運動会に注目したい。日本女子大学校の運動会は創設当初の1901年から開催され、成瀬が死去した1919年までに13回行われ、今日まで続く大きな学校行事の一つである⁽²¹⁾。運動会では、成瀬の下で開発・導入された新しい女子スポーツや体操、ダンス、自

以上のことから、日本女子大学の総出で行われた運動会は、学生の身体を強健にするだけでなく、学生の運動会に関わる事柄の計画し組織する力、発表する力、他者と協調し受け入れる心、責任を果たす能力を養成する学校行事であったことがわかる。これは今日の運動会が健康安全・体育的行事として求められる、「安全な行動や規律ある集団行動の体得」、「責任感や連帯感の涵養」「体力の向上に資するような活動」という教育目標に相当するものであった。それでは学生の自治活動における社会参画という面ではどうだったのだろうか。その實際をうかがい知れるエピソードがある。毎年行われた運動会は1915年の第13回を契機に3回にわたって休止した。成瀬が第一次世界大戦の間の運動会の開催を禁じたからである。このことについて学生たちからは開催の要望があった。当時についてある学生の回想である。「入学以前から欧州戦乱のうちにあって…私どもも毎年の秋をむかえましても制しきれない活動の力を現はす方法に苦しみ、研究に集注したり外の催しをしたりして其の要求の幾分を充さうと致しておりました。…私共の間には全体の集注点として一層活動的な運動会がしてみたいと云ふ考えが出てまいりましたので其を幹事会に持ち出しました。成瀬先生は生徒の自発的の計画であれば一度はさせてご覧になるのが常で御ざいましたのになぜか此時の運動会はどんな内容でもどんな方法でもお許しになりませんでした。一日幹事会に御出席くださいまして『皆の内的活動を何か形式に発表して見たいと云ふのは同情出来る。併し時代は本校に対し何を要求して居るか、運動会と云ふ様な事をして居て時代の精神に共鳴して居るか』と仰いました。私共は此暗示としての御教へを解か



うとして苦しみました。従て其具体的工夫はなかなか出せなくて居りました。」⁽²⁷⁾

この時の成瀬がなぜ運動会を中止にしたのか、その真意はわからない。おそらく帰一思想に基づく帰一協会の創設者であり、女性による世界平和運動にも尽力した成瀬の活動を鑑みれば、戦時下における運動会の実施は彼の考えに沿うものではなかったのかもしれない⁽²⁸⁾。しかし学生たちがこの時期の運動会の連続中止にショックを覚え、少しでも実施できれば、という思いが募っていたことは想像できる。今日の2020年のコロナ・ウィルス感染拡大予防のため、各地の学校で各種の行事が縮小・中止された状況を思い起こされるものである。そのような状況下で学生たちは自らの考えのもとに集まり、積極的に対話をしながら、運動会を計画しようとした様子がうかがえる。これは成瀬が日ごろからやはり学生たちの自治的な活動を奨励して、一度は計画された活動を体験させることをしていたからであろう。そのような成瀬と学生たちとの交流もまた対話的であったのだろう。だが、学生たちに返された成瀬の思いは、意外なものであった。その思いからは成瀬が学生たちの自治活動が単なる学内の活動に留まるのではなく、「社会に開かれた」教育活動であると考えていたことがわかる。そして学生たちに、現在進行する社会の状況をよく認識し、その行く末を自ら考えた上で、自らの行動を興せ、と問いかけている。このことから運動会という学校行事を通じて、社会における自己実現とはなにか、責任とは何か、ということを追及した日本女子大学校における教育の実相が想像されよう。

5. まとめ

以上、成瀬仁蔵の自学自動の教育理念と学生たちによる自治活動の実践について検討してきた。成瀬の教育理念は、学生の自発的な動機による個人の主体的な学びを基本とすること、そして学校行事などの自治活動を通じて、学生が他者とともに課題発見や問題解決の能力を高め、自己の

生き方や考えを深める教育であったことを指摘した。成瀬の生きた明治後期の日本では、女子教育不要論がまだ根強く存在し、当時の世間一般の父母たちは、女子の教育について家庭の家事能力や伝統的な婦徳の養成を期待する者は多かった⁽²⁹⁾。そのような社会に対して、成瀬は日本女子大学校で女性が自らの判断のもと自立的に行動を起こし、社会に参画する生き方を学生たちに問いかけ、実践させることで、卒業後の学生が新しい社会を構築することを期待したと思われる。成瀬の教育実践は、現代のようにコロナ禍にあり「先が見えない時代」を力強く生き、社会を変革するための教育の在り方を示していると思われる。

以上のように本稿は成瀬の教育理念についての検討を図った。今後は学生たちの自治活動のプロセスについて、その実相の検討を図りたい。自治組織の中で、学生がどのように話し合い、活動を作り上げたのか、日本女子大学校に残る多くの運動会の史料からの分析を図りたいと考えている。

《注》

- (1) 「コロナ禍の運動会 競技や応援、密避け工夫」『中日新聞』2020年10月15日 <https://www.chunichi.co.jp/article/137173> 「コロナ禍下の運動会とは？」『朝日新聞デジタル』2020年10月8日 <https://www.asahi.com/articles/ASNB77FX-VNB6PITB008.html>
- (2) 2020年6月から7月にかけて行われた日本特別活動学会による学会員（578名）へのアンケート（回収率11%）によれば、コロナ禍における全国一斉休校や、学校行事の中止、数々の特別活動の中止に対して、約9割の会員が特別活動の意義や特質を改めて「非常に考えた」と回答している。また約8割以上の会員が特別活動の実施に関しては制約があると感じると回答した。制約を感じる理由は、集まることや話し合いをすることが難しい、教科学習に時間を割かれ、特別活動の時間を十分に確保できないという状況がある。他方キャリア教育・社会参画への意識を高める題材としてコロナ禍の状況を取り上げている、という肯定的な回答もあった。日本特別活動学会研究推進委員会（2020）『新型コロナウイルス予防対策への対応を踏まえた特別活動の課題や今後に関する調査 第一次結果報告』pp.2-5

- (3) 文部科学省 (2017)『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説特別活動編』p.6、『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説特別活動編』p.6、文部科学省 (2018)『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説特別活動編』p.6。
- (4) 例えば以下の文献がある。影山礼子 (1994)『成瀬仁蔵の教育思想——成瀬的プラグマティズムと日本女子大学校における教育——』風間書房。中畠邦 (2015)『成瀬仁蔵研究』ドメス出版。大森秀子 (2019)『成瀬仁蔵の婦一思想と女子高等教育——比較教育文化史的研究——』東信堂。永藤清子 (2020)「成瀬仁蔵の女子教育思想：——「婦女子の職務」から——」『甲子園短期大学紀要』第 38 号。真橋美智子 (2015)「成瀬仁蔵の女子高等教育における家庭、職業」『人間研究』第 51 号。また片桐芳雄による一連の研究として、例えば片桐芳雄 (2018)「成瀬仁蔵のアメリカ留学と『女子教育』の出版：日本女子大学校創設へ」『人間研究』日本女子大学教育学科の会 (54)、片桐芳雄 (2020)「成瀬仁蔵の女子大学構想と米国——Women's University の夢——」『愛知教育大学研究報告・教育科学編』第 69 号。
- (5) 石川悦子 (1981)「第 4 章 成瀬仁蔵」『近代日本女性体育史』女性体育史研究会編日本体育社。馬場哲雄 / 石川悦子 (1982)『日本女子大学の運動会史——成瀬仁蔵の体育観の発展・具象化としての運動会——』日本女子大学体育研究室。馬場哲雄 (2011)「成瀬仁蔵の「女子体育論」再考」『日本女子大学紀要』人間社会学部第 22 号。馬場哲雄 (2014)『近代女子高等教育機関における体育・スポーツの原風景：成瀬仁蔵の思想と日本女子大学校に原型をもとめて』翰林書房。片桐芳雄 (2020)「成瀬仁蔵と女子体育：日本女子大学校の「容儀体操」」『比較舞踊研究』比較舞踊学会学術機関誌 第 26 号。
- (6) 齋藤慶子 / 渡邊 巧 (2017)「成瀬仁蔵における「自学自動」の教育実践とその意義：女子の生活力改善をめざす取り組み」『人間研究』第 53 号。
- (7) 大正新教育の思想については以下を参照した。橋本美保・田中智志編 (2015)『大正新教育の思想』東信堂。橋本美保編著 (2018)『大正新教育の受容史』東信堂。
- (8) 日本女子大学 (1981)「新時代の教育」『成瀬仁蔵著作集』第三巻。
- (9) 成瀬がアメリカ留学から日本女子大学校創設までについては、中畠 (2015)、片桐 (2018、2020) 片桐芳雄 (2019)「胸突き八丁の成瀬仁蔵：帰国から日本女子大学校創設まで」『人間研究』第 55 号。を参照した。
- (10) 中畠 (2015)、大森秀子 (2019) 年、塩路晶子 (1999)「成瀬仁蔵の教育的関係に関する一考察：豊明幼稚園の実践を手がかりに」『教育学論集』第 7 巻 25 号。河村望 (2004) デューイは成瀬の婦一思想の理念に賛同し 1912 年婦一協会の設立に尽力した他、来日した際には死の床にあった成瀬を見舞った。
- (11) 日本女子大学校 (1910)『日本女子大学校の過去現在及び将来』pp.147-173。
- (12) 前掲書 pp.166-167。
- (13) 前掲書 pp.146-147。
- (14) 掛水通子 (2018)『日本における女子体育教師史研究』大空社出版。女性体育史研究会編 (1981)『近代日本女性体育史』日本体育社。
- (15) 日本女子大学 (1981)「女子教育」『成瀬仁蔵著作集』第一巻、pp.119-147。
- (16) 日本女子大学校の実施したスポーツについては、馬場 (2014) pp.81-156 に詳しい。
- (17) 日本女子大学校 (1904)「体育と運動会」『家庭週報』第 80 号。
- (18) 彼の体育論にはジョン・ロックの教育思想からの影響がある。成瀬によれば体の筋肉や神経系統や内臓を鍛えることは①「現在の生活を快適」にし「将来發達の基礎と為すこと」になる。また②身体を自分の意志で「容易に圓滑に」動せるようになることは、自由な精神活動を表現しやすい身体を作る、③日本国民全体の心身の向上につながると説く (『新時代の教育』p.173)。
- (19) 例えば歌人の山川登美子、宮沢賢治の妹の宮沢としもまた在学中に患ひ死亡している。心理学者の高良富も在学中に寮内で病に感染し休学を経験したと述べている。高良とみ (1983)『非戦を生きる 高良とみ自伝』ドメス出版。
- (20) 日本女子大学校 (1910)『過去未来及び現在』p.156。
- (21) 運動会の発足は 1872 年に東京築地の海軍兵学寮の運動会に始まる。兵式体操が「小学校令」に取り入れられた 1880 年代に全国的の学校で運動会が広まった。女学校の運動会は 1885 年に開校した華族女学校が 1894 年に第 1 回運動会を開催した。平田宗史「わが国の運動会」吉見俊哉『運動会と日本近代』青弓社 1999 年。
- (22) 馬場哲雄 / 石川悦子 (1982 年)『日本女子大学の運動会史——成瀬仁蔵の体育観の発展・具象化としての運動会——』日本女子大学体育研究室 pp.10-40。
- (23) 日本女子大学校 (1904)「体育と運動会」『家庭週報』第 80 号。
- (24) 前掲書。
- (25) 大正から昭和に開催された運動会の多くは地域住民が参加する行事として「村祭り」としての機能があったことが指摘される。吉見俊哉 (1999)。
- (26) 馬場哲雄 / 石川悦子 (1982) p.41。

- (27) 前掲書、pp. 41-42。
- (28) 見城悌治, 飯森明子, 井上 潤編 (2018) 『婦一協会の挑戦と渋沢栄一：グローバル時代の「普遍」をめざして』 ミネルヴァ書房。中畠邦、杉森長子編 (2006) 『20 世紀における女性の平和運動：婦人国際平和自由連盟と日本の女性』 ドメス出版。
- (29) 小山静子 (1991) 『良妻賢母という規範』 勁草書房 pp. 41-60。